横顔
就任インタビュー

地域密着の病院守り続けたい

1949年に社会保険蒲田総合病院として開院して以来76年間、地域に根差した医療を担ってきた東京蒲田医療センター（東京都大田区）。院長に就任した田村晃氏に今後の抱負と経営方針を聞いた。

独立行政法人地域医療機能推進機構
東京蒲田医療センター
田村（たむら） 晃（あきら） 院長
1992年東邦大学医学部卒業。同大学一般・消化器外科学講師、東京蒲田医療センター消化器外科診療部長、同センター副院長などを経て、2025年から現職。

独立行政法人地域医療機能推進機構 東京蒲田医療センター
東京都大田区南蒲田2-19-2 ☎03-3738-8221（代表）
https://kamata.jcho.go.jp/

標準的な診療科で地域の声に応える

田村氏が今後の抱負として最初に挙げたのは経営・医療状況の改善である。

「当院の状況はたいへん厳しい。だからこそ職員は職種を超えて協力し乗り越えよう、というのが私の抱負です」

同院のある蒲田地区は当面、人口は横ばいが続く見通しだが、高齢化は進んでいる。「当院は2次救急指定病院。急性期医療としての体制を維持しつつ、高齢者医療は今後も積極的に診療していきます」

内科や外科、整形外科、泌尿器科、耳鼻咽喉科など標準的な診療科を有する同院だが、今後も特殊な診療科目は置かず幅広い医療の提供を目指す方針に変わりはない。

「当院で患者数が最も多いのは内科です。消化器内科を得意とする医師がそろっており、消化器疾患にはよく対応しています。当院は蒲田地区唯一の公的病院であるため、患者さんの多い診療科目を置き、地域の方々に気軽に通院していただけるようにしたい。それこそが当院をもり立てることにもつながる」と、より多くの地域住民に頼りにされる病院づくりを強調する。

顔の見える関係が密な連携を生む

田村氏は、周辺の医療機関との関係づくりにも力を入れている。「今の時代は外部に発信しなくては医療・経営状況が活性化しません。そこで副院長をしていた2024年から周辺医療機関へのあいさつ回りを続けてきました」

多くの医師の派遣を受けている東邦大学医学部（大田区）の教授に協力を依頼したり、近隣のクリニックに患者紹介の要請をしたり。あいさつ回りの効果はすぐに得られるものではないが、どの施設からも前向きな反応を得ているという。

院長への就任後はさらに訪問先を広げ、高齢者施設にも積極的に出向いている。「高齢者施設はそれぞれ提携する医療機関があるものの、診療時間外は不在で夜間対応できないことが多い。当院は夜間の急患にも対応しているので、高齢者が急変するような事態になったらぜひ来院していただきたい」。同院の存在感を示すべく、今後あいさつ回りの頻度も増やす予定だ。

気軽に利用でき懐の深い病院に

地域連携のため、各医療機関に向けた同院主催の会も年1～2回行っている。「内容は東邦大学医学部や池上総合病院などが最近の医療トピックスなどを解説するミニ講演会です。毎回40～50人の医療関係者に足を運んでいただいています。当院の医師と近隣の医師らが直接会話することで、連携も進むと期待しています」

地域への目配りは、同業者にとどまらない。周辺町内会主催の行事に職員が参加したり、地域の祭りでは同院の敷地を提供したりと、地域との交流を一層深めて行く予定。「当院を身近に感じ、気軽に利用してもらえる状態を目指したい」

一方で、院長は経営責任を負う立場でもある。「前院長は診療報酬に詳しく、職員が見過ごしがちな加算をよく指摘していました。救急医療管理加算など忙しさのあまり忘れがちなものは決まっているので、引き続き対応します」

改善すべき点は多いが田村氏が重視するのは病院としての懐の深さだ。「当院は気さくで話しやすい職員がそろった地域密着型の病院。経営面だけにとらわれず、地域の健康と生活を守ることが最重要です。今後とも地域住民と周辺医療機関が気軽に利用できる病院として活動していきます」